

目次

灯火が消える前に

5

訳者あとがき 260

解説 羽住典子 262

主要登場人物

- オリバー・チャーチ……………大学教授
アリス・チャーチ……………オリバーの妻
ジャネット・マークランド……………著作権代理人
セシリー・ライトウッド……………刺繍作家
フランク・レーリー……………スリラー作家
ピーター・ウイリング……………著作権代理人
ロジャー・メイス……………物理学者
オーブリー・リッター(リット)……………劇作家
エドワード(エド)・ラーグ……………アメリカ空軍兵。軍曹
ロザマンド……………リットの妻
ジョン・ロウパー……………医師
キティ・ロウパー……………ジョンの妻

灯火が消える前に

第一章

アリスがよく考えるのは、初めて会ったときのジャネット・マークランドの第一印象だ。自分はないを見たのか、セシリー・ライトウッドの居間に入って、暖炉のわきに立っているジャネットを見たときどう感じたのか。

しかし、記憶に一切の脚色を加えずに置くのはそう容易ではない。とくに第一印象が希薄だった場合、あとから得た知識や認識が当初はなかった奥行きや具体性を補填しがちである。アリスにとつて初めてジャネットの顔を見たとき、残忍そうだと優しそうだとも思わなかったという事実はやや認めがたい。感性になにか欠けるところがあると思われそうだからだ。だが、その晩のジャネットについて嘘偽りなく覚えていることと言えば、肩のあたりに疲労をにじませた細身の女性がそこに立って火を見つめていたこと、三十五歳くらいで黒の無地のウールドレスを着て、やわらかそうな明るい茶色の髪をしていたことぐらいだった。ひそかにかっかりしていたと付け加えることもできるかもしれない。セシリー・ライトウッドの話から、ジャネットを暖炉脇のその女性よりもはるかに生き生きとした個性の持ち主として思い描いていたからだ。しかし言うまでもなく、ジャネットの控えめで濃厚で冷静沈着なところが、セシリーの気難しさと相性抜群だったのだとやがて理解できるようになった。そう、ジャネットがもつと目立つタイプだったり、威圧的だったり、長所短所がはっきりとわ

かるような人物だったなら、セシリーはとつくの昔にジャネットと大喧嘩していただろうし、嫉妬したり不信任を抱いたりしてわざわざアリスと引き合わせようなんて夢にも思わなかっただろう。

セシリーはアリスをまっすぐ暖炉のところへ連れていき、ふたりを引き合わせた。「ジャネット、こちらアリス。アリス、こちらがジャネットよ」

ジャネットはにっこり微笑んだ。「なんだカルイス・キャロルの物語を思い出しますわ。はじめまして、チャーチ夫人。お会いするのを楽しみにしております」

口を開いたとたん、プロフェツショナルな人物であることが伝わってきた。抑制が効き、堂々としていて、人慣れしているのだが、その親しげな態度も仕事上のテクニクであるような感じがしたからだ。

ジャネットは愛想よく続けた。「こちらには以前もいらしたことがおありですか？　いつも思うけど、セシリーのうちってなんて美しいんでしょう。我が家なんてひどいものですわ」

「なに言ってるの。わたくしよりずっときれいな好きのくせに」セシリーが語気荒く遮った。反論、異論があると、それがどんなささいなことでも攻撃的になる性質たちなのだ。

「そうかもしれないけど、そういうことを言ってるんじゃないのよ」ジャネットが穏やかに応じた。「調度品やその配置、色合いがすてきだと言ったの……。うちには心底気に入っているものはひとつもないし、住むだけの場所よ。どうやって調度品を選べばいいのかわからないし、気後れして最初に見たものを買ってしまうのよ。そんなわたしでも我が家のインテリアがお粗末なことや、ここがすばらしいということはわかるわ」

セシリーは得意げに、あなたもただちにジャネット・マークランドの人柄のよさを見抜きなさい、

と言わんばかりの視線を送ってきた。まるで宝物を見せびらかしているように誇らしげに。

その晩の、セシリーはとても魅力的だった。生き生きとして、目は輝き、興奮していた。ときおり無造作に見えることがあるものの、均整の取れた堂々たる体つきでドレスを華麗に着こなし、身のこなしは少女のようだった。深い鮮やかなブルーのドレス、きちんとシニヨンにまとめたグレーの髪、上気した頬、仕草のひとつひとつを優雅でしなやかに見せるバイタリテイ、本当にセシリーは人目を引く女性だった。

テーブルのほうを向いて、セシリーはグラスをふたつ手に取り、それを友人たちに手渡ししながら言った。「わたくしはちよつと席を外すわ。どうぞおふたりで親交を深めてちょうだい。アリス、あなたをいちいち他の人々に紹介するのはやめておくわ——」セシリーは軽い調子でその場にいる三人の男たちを示した。「あなたはジャネットと話しをしていて。おふたりにお友達になつてもらいたい。絶対に気が合うと思うわ」自ら命じた新たな友情を祝福する微笑みとともに、セシリーはその場を去った。残されたふたりは素直に顔を見合わせ、笑顔を作ると、会話を試みた。

セシリーはパーラメント・ヒル・フィールズに近い古い屋敷を改装したフラットの一階に住んでいた。部屋は天井が高く広々としていて、大きな窓と重厚な大理石の暖炉がついていた。そんな古めかしく、とりたてて特徴もない部屋が、いまジャネットが言ったように、セシリーの手に掛かると、とても魅力的に見えた。リンゴ材の家具、くすんだ暗緑色の壁と絨毯、品のいい英国の古い陶器類、びっしりと刺繍が施された灰色の粗絹のカーテン、どれもこれも美しい。戦前、セシリーは刺繍作家をしており、ここにあるカーテンはその作品サンプルなのだ。アリスにとつて、その配色の妙と上品さは驚きだった。なにかと大げさなセシリーの性格から、大胆さや毒々しさを思い描いていたからだ。

長細い部屋の奥にはクリーム色の麻布をセツトした刺繡台があり、その上に昼光色の電球が取り付けられていた。どうやら、アリスと知り合うことになった市民助言局や検閲局での多忙な日々の合間を縫って、独自の作品作りを続けていたらしい。

セシリーは部屋の向こうにいる軍服姿で猫背の長身の男に話しかけに行っていた。

ジャネットが低い声で囁いた。「ふたりでいると、お互い気詰まりになりそうですわね、チャーチ夫人。お互いの話を聞かされすぎていて、そのあれこれをうまく消化できないんですわ。あなたは想像とはまるで違っていたし、わたしも同じはず。一番いいのは、これまで聞いた話はすべて忘れてしまうことなんですよね」

「それを言うなら、わたしはこの部屋にいる全員に対してそうしたほうがよさそう」アリスはそう言いながらも、セシリーから他の人々についてもちゃんと教えてもらっておくんだっと思ったていた。あの青白い長い顔に手入れた口ひげをたくわえた軍服姿の長身の男は、スリラー作家のフランク・レーリーだろうか。自身について語っていたことがすべて本当なら、セシリーには才能があつて興味をそそられる友人が大勢いて、アリスの交友関係とは大違いのようだった。

「確かにそうね」ジャネットが言った。「あなたはきつと、フランク・レーリーの女関係や必ず振られる理由、ピーター・ウィリングの胃弱、ロジャー・メイスの飲酒や鬱についても残らず聞いていらつしやるんですよ。それを隠しておかなければと思うから気まずいんだわ。そんなにいろいろ知られていたら、みんなさぞかし居心地が悪いでしょうと思うから」

「実際は、それほど多くを知っているわけじゃないと思いますけど」アリスは言った。「セシリーの見解のほかは」